

群馬司法書士新聞

発行所 群馬司法書士会

発行人 岡住貞宏 編集人 島田貞夫

2012年2月10日発行・No.10

震災対策特別号

特集・避難者の現在
カメラが見た(会津編)
阪神淡路の体験は

特集

いま 避難者の現在を訪ねて —凍てつく窓から望む復興への道—

仮設住宅問題特集の第2回目。今回は会津若松市の仮設住宅群を訪れた際のルポを掲載する。本会会員の筆者は、この仮設住宅群で被災者の様々な感情と直面する。その多くは当然、苦悩であり、怒りであり、諦めであった。しかし、そんな場所にも、感謝や連帯の意思が、そしてうっすらとした未来への希望が、ひっそりとしかし確実に息づいていた。

梨の花咲く町から

群馬司法書士会が実施する仮設住宅訪問は今回で3回目となる。今回は会津若松市の応急仮設住宅（以下仮設住宅と記す）、主に大熊町の方々が避難されている仮設住宅群を訪ねた。

大熊町は、第一原発の所在地として知られている町だ。行政区分では、双葉町、富岡町等の市町村と接し、東は太平洋と接する。

東日本大震災後、東電原子力発電所の事故により、町全体が立入り不可の地域となったため、住人全員が他市町村に避難している。

町役場も、その機能を移転せざるを得なくなり、現在、会津若松市栄町の会津若松市役所追手町第二庁舎に仮役場を開設し、その機能を移している。

大熊町は、阿武隈山系の山と雄大な太平洋に囲まれた自然豊かな町だ。フルーツ、特に梨の産地として名高い。梨の花は、町の花として定められている。「フルーツの香り漂うロマンの里 おおくま」は、町のキャップフレーズだ。

梨の栽培は、大正時代から本格的に始まったそうだ。その当時に植えられた梨の木が今も実を付けるという。樹齢は100年にもなる。

梨畑は、町役場の近隣に集中している。

梨畑の一番きれいな季節は春だ。桜が散ると、やがて梨の花がその可憐な白い花を咲かせ、高台から見ると、梨畑一面に咲く可憐な梨の花は、まるで雪景色のようだという。

後記の商店主の奥さんは、「本当に綺麗よ。」と力を込めて、その情景を我々に語った。

その故郷に、今は帰りたくても帰れない。

果樹園を営んでいたという避難者は、一時帰宅の折に見た梨畑を次のように表現した。

「草もぼうぼう。枝もぼうぼう。」

復興へ（農業）

誰も手入れをしない田畑や果樹園は、自然の営みが勝手気ままに振る舞う。雑草がはびこり、昆虫がその棲家とする。

梨畑を元の状態に戻すには、仮に帰宅がなかったとしても容易ではない。前記の果樹園主は、再生の過程を次のように語った。

「今ある木はダメだ。もう使えない。全て切り倒し、根も全て掘り起こし、撤去しなければならない。その上で再び整地し、新しい木を植える。木が成長し収穫出来るようになるには、それから10年かかる。」

「俺の代では、無理だろう。」

梨畑は、第1原発から数kmの地域に集中している。帰宅が最も困難な地域と考えていいだろう。新しい木を植えることが出来るのはいつの日のことだろうか。その日は、現時点では限りなく遠い。

他の耕地も同様の状況だ。

仮設住宅の通路で軽自動車を洗車していた70歳代の男性に会った。自宅は第一原発の煙突



が間近に見えるところにあるという。洗車していた手を休めて、

「稲作を中心とした農業をしていた。米の銘柄は、コシヒカリ、一毛作なので冬の間は殆ど休み」と、大地震前の、生業を語ってくれた。

「今の様子は？」との質問に対しては、

「田や畑は身の丈ほどの雑草が生えている。以前の田畑の面影はな

い。」

「牛や豚が好き勝手にうろついている」と、一時帰宅した折の状況を教えてくれた。

同じく農業をしていたという方に、他の仮設住宅でも会った。第1原発から3kmほどの地域に住んでいたという60歳代の男性は、「この先どうなるのか、どこに行くのか、全くわからない。」「自宅や田畑は、買い上げ、借り上げが現実的。」と、先の見通しを述べ、「(原子炉を)廃炉するのに40年かかるというから、帰宅できるのは、30年40年先だろう。」「俺は、100を軽く超えてしまう。」と、白い歯を見せた。

稲作は、大熊町農業の中心だ。水稻の作付面積は約600ヘクタールにも及ぶ。その豊かな水田が東電の原発事故により排出された放射能で汚染されてしまった。農業の再生の条件は汚染物質が取り除かれることが前提であるが、それだけではない。放棄された農地の再生は、長い時間を費やす根気のいる仕事であるという。また、帰宅までに、長い時間を要すれば、担い手である耕作者の高齢化も深刻な問題となるだろう。

復興へ（商業）

東北自動車道から磐越自動車道にルートを変えると、積雪量が急に多くなる。

我々が今回訪問した会津若松の仮設住宅には約3400人の被災者が雪国の暮らしを強いられ暮らしている。

福島県の浜通りと呼ばれる海岸沿い地方の中央部に位置している大熊町は、雪が降るのは年2～3回、積雪量も少ないそうだ。雪かき、雪下ろしなど、慣れない作業は身にこたえるに違いない。

我々が訪問した日、仮設住宅群は、雪に埋もれていた。前夜に、また新雪が積もったらしい。仮設住宅の屋根から40センチほどに伸びたつららが垂れ下がっている。寒さも厳しく、朝方は、戸が凍りついてしまうという。



我々は、たまたま、訪問・巡回先の仮設住宅の室内でお話を伺う機会を得た。

部屋には、商店を営んでいたというご夫婦と隣室に居住している友人の方がこたつで暖をとっていた。ご友人は花屋さんだという。

壁に写真の入ったパネルが飾られている。一時帰宅の折に写した商店街の写真だそうだ。

「ここが、私のお店。こっちがこちらの方のお店。」と花屋さんが指さした。シャッターが折れ曲がっている。地震によるものだ。

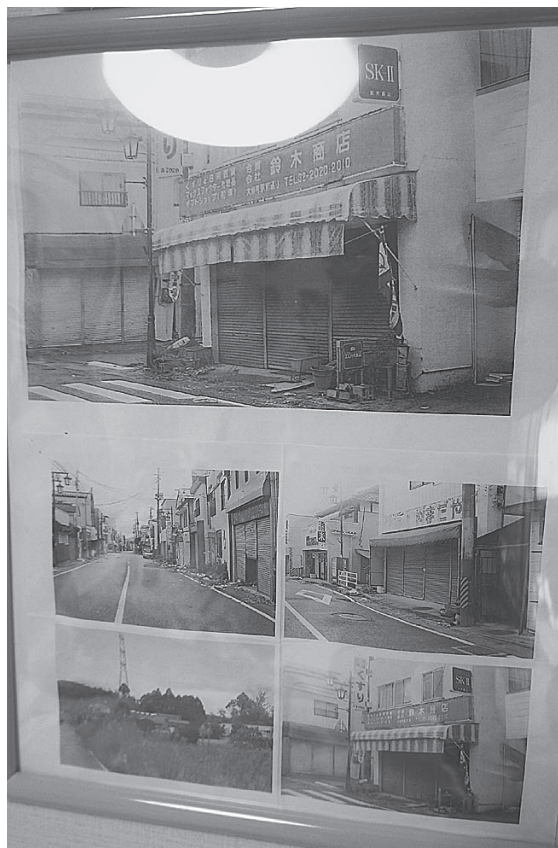
持参した群馬司法書士新聞を差し出し、訪問の趣旨を説明する。記事を目にすると堰を切ったように花屋さんが話しだし、ご夫妻も加わる。

「二重ローンの問題よりも、今ある借金の問題のほうが頭が痛い。今は、返済を待ってもらっているがいずれは返さなければならない時が来る。」

「補償金は事業者としての請求はした、個人の請求はしていない。先日、結果通知が届いたが、一部が認められなかった。純益のみを補償の対象とする東電の取り扱い是不合理だ。現状を反映していない。」

「認めないなら、領収書の原本は返すべきだ。」

花屋さんは、現在、立ち入り禁止地域以外で商売を継続しているそうだ。しかし、顔見知りの少ない地域で地元匹敵する売上を上げることは難しいだろう。



「東電は、のれんの価値を全く考慮していない。私達の商売で一番大切なものは信用と信頼。」

以前のように、商店街で商売を再開するためには、かなりの時の経過を要するだろう。再開したとしても、時刻の経過は、商店街を取り巻く状況を大きく変えてしまうかもしれない。また、他の土地で、

今後、商売を継続するとしても、現在の借入金の取り扱いと新たな事業再開の資金確保の問題を解決すると共に、商売の基盤、「信用と信頼」を、いかに構築していくかという課題に立ち向かわなくてはならない。いずれにしても、イバラの道だ。

助けあう（個と個）（公共と個）

復興・再生へ、必ずしも順調な過程をたどらないであろうことは、避難者の誰もが、すでに予想しているように見える。

住居の問題一つを取り上げても、2年と予定されている仮設住宅の入居期限内に、復興住宅への入居や自宅への帰宅・再建といった次の過程へ進む見通しは現在のところ、まったく立っていないといっている。

将来の見通しが見えない今、それでも、多くの避難者の皆さんは、希望の火を絶やさないように、お互いに協力しあい、今を暮らしている。仮設住宅は、将来の復興・再生のためにも、そのエネルギーを蓄えるための場所となる必要がある。

そのためには、もとの生活環境、特に地域コミュニティを維持することが重要な要素となる。

阪神淡路大震災では、入居の優先順位を高齢者と障害者にしたために、結果的に、バランスの良い地域コミュニティを維持することが困難な環境を作ってしまった。

そうした先例を参考にし、会津若松市の仮設住宅の入居にあたっては、自治体は、地域コミュニティの維持を図るため、同じ地域の住民がなるべく同じ仮設住宅群に入居できるように入居条件を定めたという。

そうした配慮が功を奏したのか、前記の農家の方や商店主も「仮設は、顔見知りが多いので心強い。」と一様に語っていた。

仮設住宅に入居している多くの町民は、震災直後から、目的地をも告げられぬまま、着の身着のまま避難し、避難所、親戚、と転々と居所を変え、最終的にここの仮設住宅にたどり着いたという。

知らない土地、なれない環境に移動する毎に、人はエネルギーを費やす。移動をする度に気力や体力は削がれていったに違いない。

「避難所は本当にきつかった。」

「けれど、避難先の新潟では、本当にお世話になった。感謝している。何時の日か、お礼を言いにいきたい。」

と、前記の商店主は、しみじみと我々に語った。

度々の移動に疲れきった末、仮設にたどり着いた人々にとっては、仮設住宅は一時的な仮の住まいとはいえ、安らぎの場所であればならないと思う。



地震直後の津波で自宅を流失した上に、更に追い打ちをかけられるように原発の被害を受けた70歳代の女性は、

「地震の後、20～30分で津波が来た。避難所の公民館も流された。幸い、一家全員助かった。けれど、家は流され、土台以外は綺麗さっぱり何もなかった。」

「仮設住宅では、近所、部落の人が一緒なので心強い。」

と、今の心境を語った。



地域コミュニティを維持するだけに留まらず、積極的に社会的なネットワークを構築しようとする動きもある。

我々は巡回中に、たまたま集会所で、生活支援ボランティア「つながっぺ! おおくま」の催しにあった。

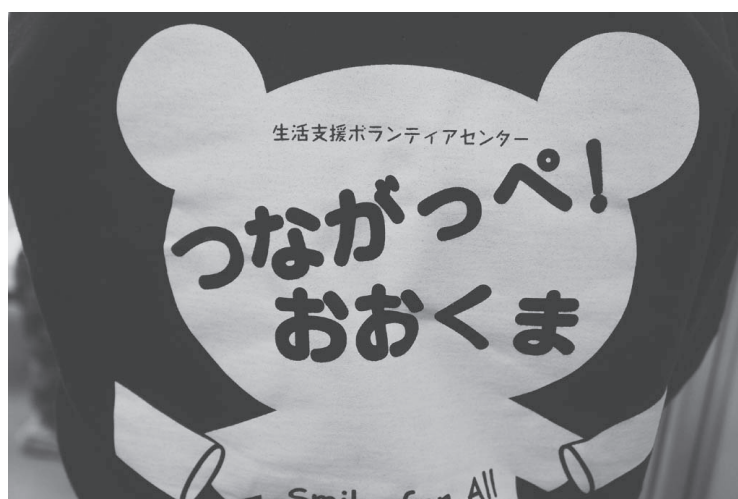
「つながっぺ! おおくま」は、大熊町社会福祉協議会が進めている

事業だ。

避難をされている方々が少しでも安心して生活できるよう、お互いに支えあう仕組みづくりなどを進めているという。この仮設住宅では、5のつく日に集会が定期的に行われているそうだ。

集会所の中を覗かせていただくと、室内には数十の方が、お茶菓子をつまみながら楽しそうに話っていた。背中に「つながっぺ! おおくま」のロゴの入ったTシャツを着たボランティアの人達が、せわしく、行き交っている。

このボランティア活動の特徴は、避難者が避難者のために活動していることにある。まさしく、お互いに支え合う活動なのだ。



我々が外に出ると、背後から楽しそうな歌声が聞こえてきた。

振り返ると、屋根から一塊の雪がドサリと落ちた。人々の熱気で雪が緩んだのだろうか。

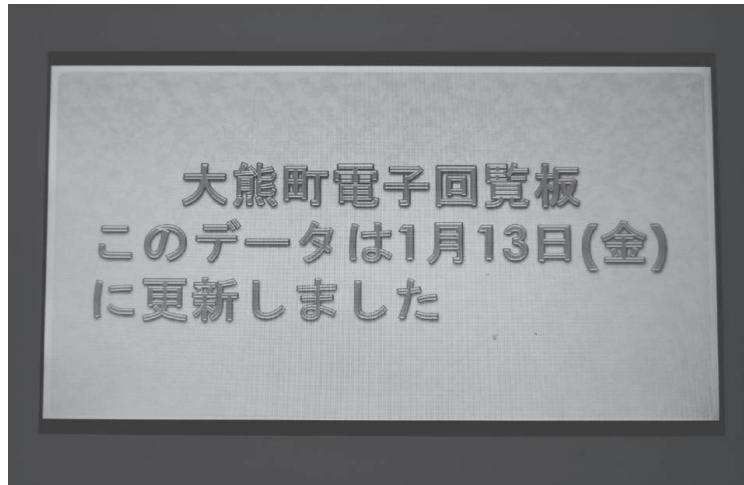
住民の情報の共有も重要なテーマだ。

大熊町が、実施している事業の一つに「電子回覧板」がある。

3G回線を利用した、フォトフレームで、無料で町民に貸し出している。大熊町からの情報を定期的に表示しているそうだ。

我々のおじゃました前記のご夫妻宅にも設置されていた。我々の

目の前で、画面は何度も変わった。使い方次第では、有効な情報伝達媒体となるだろう。



今回巡回した仮設住宅群での、情報の共有や地域コミュニティの維持は、我々が訪問した範囲内では、比較的うまくいっているとの印象を受けた。

巡回した方々の多くが、「顔見知りが多く心強い。」と述べている。しかし、少数ではあるが、違った印象を述べた入居者ももちろんいた。

第一原発のすぐ近くに住んでいたという60歳代の独居者は、「いろんな避難所を回って、ここに来る前はホテルで避難生活をしていた。仮設住宅には、11月に、やっと入居できた。」

「仮設住宅の入所者は同じ大熊町の人達だが、親しい人は殆どいない。顔見知りも3~4人だ。」と、自分の状況を語った。

「つながっぺ！おおくま」の賑やかな声が漏れ聞こえる集会所の脇の路で、「ああ言う所は、好まない。」と「集会には参加しないのか。」と尋ねる我々の質問に手を振り、入居している仮設に帰っていった買い物帰りの高齢者もいた。

巡回・訪問していると、一定の割合で、我々の訪問に反応してくださらない方がいる。応えのないドアの前で、我々はそのわけを想像するしかない。あらゆる可能性が考えられる。

単に、呼びかけの音が聞こえなかつただけかもしれない。あるいは、煩わしかったのかも。それとも、応対する気力がなかつたのだろうか。

「情報の共有や地域コミュニティが比較的うまく維持されている印象」は、我々が目にしたものだ。しかし、閉ざされたドアの内に、深刻な状況が潜んでいる可能性もある。

我々はそうした可能性を排除してはならないのだ。被災者の方々のあらゆる状況を想像し、対処する能力が試されている。

未来へ

会津若松市は、雪深い町だ。

仮設住宅の入居者も慣れない除雪に追われる。大熊町の仮設住宅群では、通路の除雪は



町の費用で行なっているそうだ。

我々も、数カ所の仮設住宅で、ブルドーザーによる除雪作業を目撃した。

ある仮設住宅の中庭で、除雪作業で積み上げられた雪の大きな塊を利用して、子供たちがそり遊びをしている光景に遭遇した。

長さ10メートル程のスロープを作り、巧みにソリを操って滑り降

りている。多くは小学生だろう。交代で、何度も何度も滑り降りている。

顔が上気している。楽しそうだ。

その中庭の一角で、30歳代の男性が2歳ぐらいの幼児を遊ばせていた。

震災後、配転で、今は茨城県で勤務しているという。単身で赴任し、家族の入居している仮設住宅には休日になると帰るそうだ。

今後の見通しを尋ねた。

「故郷には帰りたいが、帰宅よりも（子供たちが）安全に暮らせることが第一だ。」

「仕事は選べても、故郷は選べない。何時の日か、子供には故郷を見せてやりたい。」

「故郷に戻り、子供にここが故郷だといえるようになるには、30年はかかるだろう。」

幼児は、自分の背よりも遥か上に積み上がった雪の山に、登ろうとチャレンジしては、何度も滑り落ちる。

父親の見つめる目が優しい。



スロープの脇で雪の大きな塊を繰り抜いて、「かまくら」のようなものを作ろうとしている小学生がいた。戻りたい？と尋ねると、

「戻りたいけど、ここも楽しい。」
と、笑顔を見せた。

子供たちが見せる屈託のない笑顔は、現在の環境に順応しようとしている象徴のようにもみえる。

時の経過は、皆等しい。しかし、子供たちにとっては、概して、大人のそれよりも変化が激しく、影響も深い。

大人たちが、行動を躊躇し、逡巡している間にも、子供たちの成長は止まない。やがて、幼児は小学生となり、小学生は中学生となる。

仮設住宅の入居が長期化し、阪神淡路大震災と同じ5年間以上に渡るとすれば、小学6年生は中学を卒業し、高校生に成長するのだ。



子供たちが夢中で雪遊びをしている中庭を抜け仮設住宅の側面に出ると壁面に大きな木の壁画が描かれていた。



中央に黒い太い幹が描かれ、ハートの形をした鮮やかな赤い葉が茂っている。ボランティア団体の指導で子供たちが描いたという。

大きいもの、小さいもの、歪んでいるもの、子供たちが思い思いに描いたハートの葉は実に様々だ。そのひとつひとつに、描いた一人一人の個性が滲む。

中庭で、雪遊びを続ける子供たちの声が、冬空に響く。
見上げて目を閉じると、今の状況を乗り越え、すくすくと大木に成長した子供たちの「ハートの木」が見えた。

(いしかわてつお)

カメラが見た「仮設住宅巡回訪問」 会津編

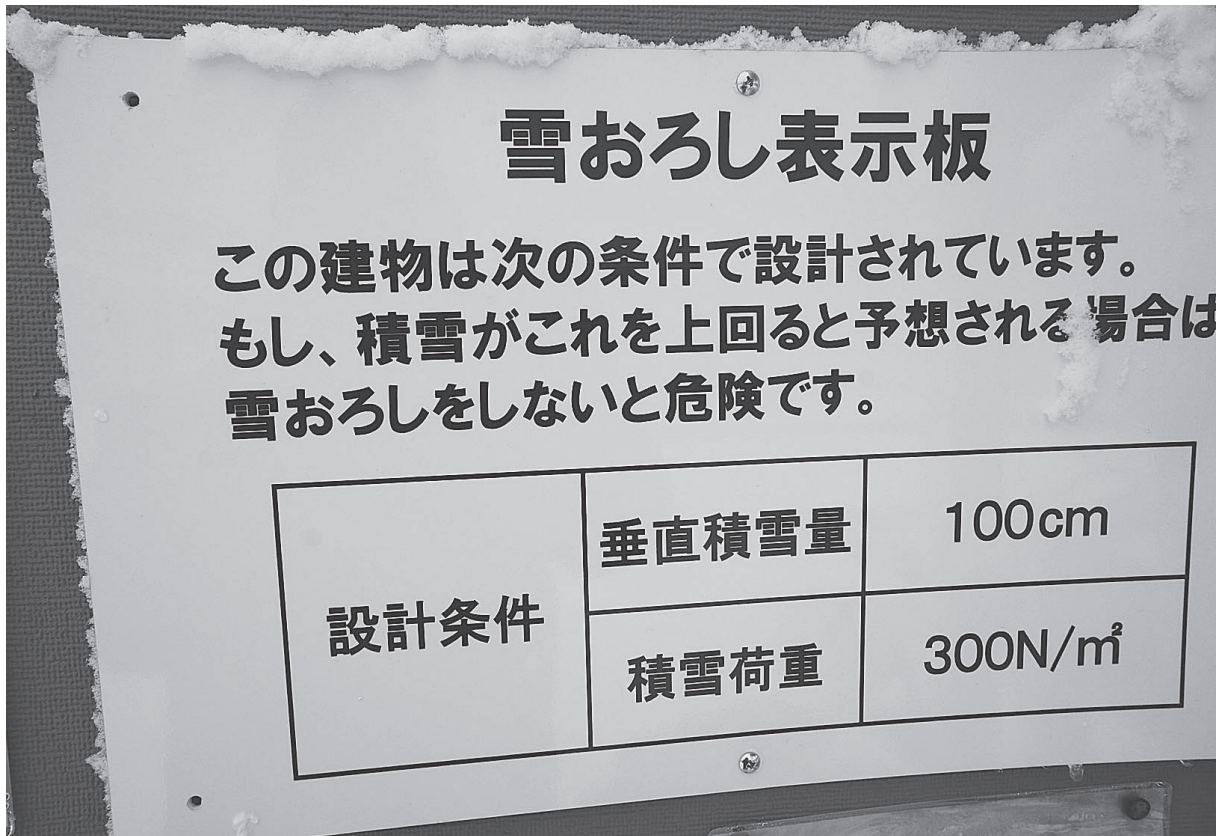
平成24年1月14日(土)・15日(日)の2日間にわたり、群馬司法書士会会員15名、兵庫県司法書士会会員12名、総勢27名で会津の仮設住宅を巡回訪問してきました。会津に避難されている方々の大半は浜通り(大熊町、双葉町、樽葉町)からでした。当日の積雪30cm、気温マイナス6度。温暖な避難元から見れば、豪雪、極寒の地です。寒さに打ち震える住民の方々はどう過ごしているのでしょうか。



会津美里町宮里団地(259戸) 寒さと雪のためか人影がない。



屋根から雪の固まりが垂れ下がっている。今にも落下しそうだ。



積雪が1メートルを上回ると危険と表示されている。しかし、住民が雪下ろしをするのは不可能だ。自治体によっては業者に雪下ろしを依頼しているところもあるようだ。



皆で通路の雪かきを手伝う。



会津若松市城北小学校北団地（54戸）
左棟は屋根がフラット、右棟は傾斜屋根だ。同じ団地のなかで屋根構造が違う。不思議に思われた。



通路には溶けた雪が凍結している。とても危険で歩くことができない。



会津若松市松長5号公園団地（19戸） まさに、雪に埋もれていた。



猪苗代町上川原団地（10戸） さらに雪深いところに建っていた。



雪の圧力で窓が破壊されるのを防ぐため「雪囲い」が設置されていた。

※ 次号の特集予告 ※

「避難されている方々の声」は今号で掲載する予定でしたが都合により次号に変更します。

掲載変更につきお詫び申し上げます。昨年9月、12月、今年1月と福島県内の仮設住宅を巡回訪問して避難されている方々の様々な話を伺って参りました。また、支援ホットラインを通じて相談に応じてきました。その中で、避難されている他の人々の声を聞いてみたいとの要望が多々ありました。そこで、今までの群馬司法書士会の支援活動の中で記録してきた「声」を皆様にお届けしたいと思えます。

次号で

『避難されている方々の声』

を特集いたします。

阪神淡路大震災を経験した司法書士が 群馬の司法書士と支援活動を共にする

会津若松市を中心とした仮設住宅巡回訪問に神戸から12人の司法書士が参加しました。コメントが寄せられましたので、以下にご紹介します。

* 東日本大震災での仮設住宅の世帯構成がどのようになっているのかは、まだ判らないが、世帯を一人暮らし、夫婦のみ、夫婦と子、その他の4種類に分けると、おそらく最も多いのが一人暮らしの世帯であろう。阪神淡路大震災での仮設住宅の世帯構成が3次にわたり調査されているが、3次調査の時点でも一人暮らし世帯が40%を超え（1次44%、2次48%）、ついで夫婦のみが25%強（1次28%、2次26%）となっている。この調査結果から想定すると、東日本大震災での仮設住宅の世帯構成は、阪神淡路大震災のそれより、一人暮らし世帯の比率が高いであろう。さらに深刻なのは、一人暮らしをしているのは、そのほとんどが高齢者であるということである。世帯の中にパソコン等を使ってインターネット上の情報を収集できる方がいる場合は、その世帯の方々は、ある程度の情報を持っているといえる。しかし、一人暮らしの高齢者は、その術がなく高齢者の中でも比較的気力のある方々だけが、たまに開かれる集会等に参加して最低限の情報を得られるのみであろう。今回訪問した世帯の中でも、情報量の格差は、今後さらに広がるのではないかと感じた。情報不足は孤立化を招くことになる。東日本大震災後の仮設住宅での孤独死問題は、阪神淡路大震災後のデータを無駄にすることなく、国をあげて今すぐに実効性のある対策を打ち出さなければならない問題である。

* 福島から神戸に帰ってきて、報道されている福島の印象と実際に見た福島の印象が異なっているように感じた。報道のされ方も、どこか、違っている気がしてならない。阪神淡路大震災の時、私は、多くの家が壊れ、赤い紙や黄色い紙が貼れたところを目の当たりにした。電気は、すぐに復旧したが、水の出ない日は続いた。近所の公園や体育館は、仮設住宅が建設されたり、避難所となった。けれども、次第に、壊れていた家が修理され、水が出るようになり、学校が再開されていった。復興も感じる事ができた。それに何より、私には、帰る場所があった。今回、福島で仮設住宅に住んでいる方の多くは、帰る場所がないのである。一体、何をよりどころに、復興していけばいいのだろうか。それを思うと息が詰まってしまう。精神的に、経済的に、体力的に、弱っている人は、声（こうしてほしいというような主張）を挙げる事ができない。このことは、短いながらも司法書士として相談を受けていく中で実感している。だからこそ、被災者の声を聞き、それを、大きな声にして、日本中に届けていかなければならないと感じている。

* 阪神淡路大震災から17年、神戸の町は一応復興したように見えるが、まだまだ、様々な問題を抱えている。でも、あの時全国から寄せられた様々な支援は、今も忘れることは出来ない。福島の仮設住宅を巡っていて常に考えていたことは、震災を経験した我々がしなければならないこと、震災を経験したからこそ出来ることは何かということだった。

手を繋ぎ 雪を溶かして 道開く 切ないものが 重く沈みぬ